

平成25年度 研究推進について

胆振国際理解教育研究会 研究部

1 北海道国際理解教育研究協議会の研究(第10次研究の3年目)

研究主題

「自分と地球をつなぎ、未来を切り拓く児童生徒の育成」

(1) 研究主題について

自分と地球をつなぐ

社会は、国際化から、グローバル化へと状況を変化させている。こうした状況において、子どもたちは、その状況をしっかりと認識し、環境問題や貧困問題など地球規模の問題を自分のこととして捉え、その解決にむけて、様々な人とつながりながら、共に、その解決に取り組むことが期待されている。

そのためには、まず、一人の日本人として、自分の今生きている地域と地球上の出来事を結び付けながら、地球上の様々な人々とかかわりを持ち、異文化を受容しながら、地球と共生していく生き方を問い続けることが求められている。

このように、自分の世界に引きこもることなく、地球的な視野に立ち、様々な人々とつながりやかかわりを作り出そうとする子どもを「自分と地球をつなぐ」子どもとする。

「自分」とつながる

様々な通信情報手段でつながり、ネットワーク化された現代社会。ネットワークを通して出会ったつながりを通して、子どもは「自分の存在」を確かめるために「自分を見つめ」、そして「自己を確立」していくことになる。

自己の確立

このように自己を確立することで、子どもは、どのような生き方にも価値があることを知り、そして自分の生き方に誇りをもつとともに、どんな未来を作り出していけばよいか設計図を描くことになる。

このように「自分と地球をつなぐ」ことで、子どもはグローバルな意識を育むことになる。こうして、自己を確立した子どもは、地球上の様々な人と共に、地球的な視野に立ち、未来のために、地球規模の問題をまず地域から取り組むことが出来、行動していくことになる。

未来を切り拓く

今、この急激に変化する不確実な社会において、環境、人権、開発と地球規模の問題が絡み合う中、地球はその「持続可能な社会」まで問われようとしている。国連キャンペーンの『ESD(持続可能な開発のための教育)の10年』という取り組みが世界中で取り組まれている。本会にお

いてもその理念を理解し、実践していかなければならない。

「未来を切り拓く」とは、このような時代において、一人の日本人として生きていくために地球的視野に立ち、自分の生き方に誇りをもち、望ましい未来のビジョンのために行動していくことが必要だと考え、8次研究に引き続き主題として設定した。

自分と地球をつなぐことで、自分の生きる社会をしっかりと見つめることが出来た子どもは、未来のビジョンに向かって、様々な人々と問題を解決していきながら前進していく。「未来を切り拓く」ことで子供は、望ましい未来の姿を描き、その具体化の道を学んでいくのである。

(2) めざす子ども姿

**地球的視野をもち、よりよい未来のために、
仲間と共に行動する姿**

日本の伝統や文化に根ざした自己をもち、地球上の人々を受容し共に、地球の未来のために行動できる子どもを受容し共に、地球の未来のために行動できる子どもを育てたい。

【注目する2点の姿】

- ① 子どもは、地球的視野をもち、地球の問題を自分ごととして捉えているか。
- ② 子どもは、仲間と共に、解決にむかって行動しているか。

(3) めざす授業の姿

**仲間とともに、問題を解決し
地球の未来のために行動する姿を求めて**

これからの授業では、子ども自身がなぜ学ぶのか、この学びが地球の未来にとってどんな意味があるのか納得するとともに、自らが問題解決にむけて社会に働きかけることが大切になる。

そのため授業では、断片的な知識を教えるのではなく、子どもが地球的視野をもち、知識を生かしながら、自分自身で行動することの意味を創造する学びが必要となる。

また、仲間とともに学ぶことを実感するために、授業では、子供が多様な考えを持つ人とかかわり合いながらつながり、その違いを乗り越えながら、共に目標を作り、共に納得できる解決の道を歩むことが大切だと考える。

そのために、我々は、様々なネットワークを教室の中で作り出し、子どもの周りにある物事や住む地域と地球をつなぐことがまず求められる。

また、解決の道を実感させるには、授業の中で、まず、現実の問題を自分ごととして捉えさせ、問題解決の方法を判断させ、原因や背景をさぐりながら、解決方法を見出し、そして、自分の生活の中で、地域の人々と実践していく過程が単元構成として構成されることが重要となる。

(4) 資質・能力

共生の心

同じ人間として、他者の存在を認め、信頼関係を築きながら、共感の心を醸成し、ともに問題解決にむかうことができる心。

異文化理解

多様性を理解し、互いのよさを認め合う態度。そして、互いを理解しようとする意欲。異文化や異なる習慣をもつ人々を受容し、「つながる」ことのできる力。

コミュニケーション能力

他者とのかかわりを積極的にもつために、自分の考えを表現し、自分の考えや行動を柔軟に変化させていく共感的なコミュニケーション能力。そして、自分の考えを積極的に発信していく能力。

人間として行動する力

人と人との関係のあり方や自分を見つめ直しながら自己を確立する力。そして、地球市民として問題解決にむけて行動する力。

2 胆振国際理解教育研究会の研究

(1) 研究副主題について

研究副主題 「共生の心を持ち、自ら課題を解決しようとする学習のあり方」

共生の心をもつ

北海道国際理解教育研究協議会の第10次研究の主題を受け、改めて子どもを取り巻く現状を考えてみると、不登校の小中学生が全国で13万人を超え、うまく人間関係を築くことができない子どもたちや行きずりの殺人事件の増加が示しているように、自分中心に考え、人の心を察することのできない子どもが増えてきている。そんな中、子どもたちが平和を愛し、生命を尊び、感謝の心、思いやりの心などの豊かな心をもって、相互に支えあって生きていこうとする「共生の心」をもつことが大切だと考えた。

自ら課題を解決しようとする

平成20年の3月28日に告示された新学習指導要領では、問題解決力や探求する力の育成が大きな柱の一つになっている。21世紀の地球は、全ての人々がグローバルな視点を持ち、問題を判断し、そして、まず、自分の生活から解決にむけて行動することが重要であると考えた。

本会では「共生の心」と「問題解決力」の育成が重要だと考え、学習のあり方を求めて研究を進めていきたいと考え、副主題を設定した。

(2) 研究仮説

【仮説1】

身近な素材を用いたり、地域や地球とのつながりを意識して教材化することにより、子ども自身が身の回りや世界各地で起こっている様々な問題に対する興味や関心を高め、それを自分との関わりとしてとらえさせることができるだろう。

自分の身近にあることが、実際には世界と密接に関連していることに気付くことにより、子どもにとっては新たな発見となり、興味関心を示し、世界や地域の問題や課題を自分ごととして感じられるようになる。

また逆に、子どもが知らないと思われる世界の様々な状況を提示することによって、自分の思い、地域への思いへとひろがって行くような学習パターンも考えられる。

学習活動のモデル（平成14年度帯広大会）

- モデル1 身近なものを調べていくうちに世界とのつながりが見えてくる学習
- モデル2 異文化や世界の現実の学習から自分たちの地域や自分たちのことを見つめる学習
- モデル3 異文化や世界の現実の断片にふれながら進める学習
- モデル4 国際交流などを通して異文化や世界の現実に入る学習

【仮説2】

他者との関わりの中で、お互いを認め合い協力し合う学習の場や体験的な学習、問題解決的な学習などを通して、積極的に問題の解決に向けて社会に参加させることにより、地球市民としての自己を確立させ、ともに行動する力を身につけさせることができるだろう。

仲間と共に学習を進めていく際には、様々な意見のぶつかり合いや調整の作業が必要になってくるかもしれない。そのような経験を通して、子どもたちはお互いを認め合うことを学んでいくものである。ある場面では自分の意見を仲間に理解してもらうためにコミュニケーション能力も必要となる。教室の仲間を認めることから地球の仲間への意識の広がりが期待できる。

また、体験的な学習や問題解決的な学習といったような学習形態の工夫の中で、世界の一端に触れ、地域や地球を身近に感じるにより、自分たちの生き方を見つめ、自分たちは地域や地球の一部であることを受け止めるようになる。

地域の人々、世界の人々との出会いの中から、社会とのつながりを持ち、地球市民としてお互いに何ができるか考え、手を取り合い、行動に向けて歩みを進めることができるようになる。

このような、仲間を認め合うことの意識の広がり、学習形態の工夫、社会とのつながりの中から仲間と共に行動する力が身についていくと考える。

(3) 研究の視点

【視点1】 地球とつながり、子どもの行動を促す教材づくり

- ① 身近な素材から世界へと視野を広げる教材化
- ② 世界の現状から自分たちの地域や自分をみつける教材づくり
- ③ 行動を促す教材づくり

【視点2】 仲間と共に問題解決していく学習活動の構築

- ① 子どもの生活の場にある素材を主体的に探求する学習活動
- ② 同じ課題を持った子ども同士で協力して問題を解決する学習活動
- ③ 問題解決していく単元構成と授業展開

(4) 研究の重点

【重点1】 地球とつながることの興味・関心をもてる教材を用意する。

- ① 発展性のある内容の教材の選択・指導計画の構成
 - ・ 教科から総合的な学習の時間への指導計画
 - ・ 教科から教科への横断的学習への指導計画

【重点2】 単元の中でできるだけ体験的な学習を取り入れる。

- ① 体験的な学習を支える人材の活用
 - ・ ALT、JICA、各地域の人材の発掘

【重点3】 授業が児童生徒の主体的な学習になっているかを分析して事後の指導に役立てる。

- ① 評価シート（カード）の活用、作文や作品などの評価への活用
 - ・ 活動への興味・関心、課題を追求する姿勢などの評価を授業中や作品などを通して行う。

(5) 研究の課題

コミュニケーション能力の素地を育む小学校外国語活動のあり方

平成23年度から小学5・6年生に年間で外国語活動（英語を取り扱うことを原則とする）が導入されたが、本会において第7次研究の時から英語活動に取り組み、国際理解教育の手立てとして有効であることが確かめられている。また、そのためには、英語を異文化としてとらえ、「担任の教師が教える」「音声を大切に作る」など基本的な取り組みの重要性も確認された。

新学習指導要領に伴って「小学校外国語活動」がすべての学校で取り組まれている。その中で、カリキュラムをどう取り組んでいくかという課題はもちろんあるが、「小学校外国語活動」を通して地球的視野をもつ子どもをどのように育てていくか、ビジョンを持って取り組まなければならないと考える。「国際理解教育」としての「小学校外国語活動」をどのように位置づけて取り組むのか、実践を通して確認していく必要がある。

(6) 胆振国際理解教育研究会 国際理解基本目標

① 平和を愛する心の育成

争いを好まず、思いやりと愛情を持って他人や他国を理解し、認めようとする平和を愛する心の育成。

② 人権意識の涵養

自分も他人も、自国においても他国に対しても、すべての人間の尊重、尊厳、平等を守ろうとする人権意識の育成。

③ 自国意識と国民的自覚の形成

我が国の文化や伝統を理解し尊重する自国意識の育成と自国を愛するなど日本国民としての自覚の育成

④ 異文化理解の増進、進化

他国・他民族・他文化への理解と意識を深め、自国を含めた世界の文化及び価値観の多様性に対する尊重・寛容の態度の育成。

⑤ 相互理解・相互交流

他人や他国を理解し認めようとする態度や広く国際的、地球的、人類的視野に立って、心のふれあいを豊かにしようとする交流意欲や態度の育成。

⑥ コミュニケーション能力・表現力の育成

世界の中の日本人として、世界の人々と意志疎通できる国際的なコミュニケーション能力や表現力の育成。

⑦ 個の確立と個性の尊重

自他の個性や特徴についての判断や理解ができる。主体的に生き、いかなる困難においても屈しないたくましい意志力、柔軟な発想、物事を主体的に見る視野の広さ、自他の医師を的確に把握できるこの確立と国際性の素地を養う。

⑧ 国際社会における連携と協力精神の育成

国際社会における我が国の地位・立場にふさわしい国際的責任を果たそうとする協力・協調への実践的意欲や連帯意識、態度の育成。

(7) 胆振国際理解教育研究会 目標の系統

道協議会	胆振国際理解教育研究会			
	基本目標	幼稚園	小学校1・2年生	小学校3・4年生
目指す子供の資質・能力	空間意識の発達 (視野の広がり)	身近な環境	学校・家庭・公園・校区	地域社会(市町村) 市域社会(都道府県)
	国際性の発達課題 (自他との関わり)	人間や自然に向けられる愛を育むこと。	人間理解(自立による自己理解)を育むこと。	人間理解(自己理解と他人理解)を育むこと。
人間として行動する力	②人権意識の涵養	・友達を大切にできる。 ・友達と仲良く生活できる。	・友達と関わりを持って楽しく生活する。	・互いに信頼しあい、他人の立場を考えて温かく接する。
	⑦個の確立と個性の尊重	・たくさんの友達を作ることができる。	・自分と友達のよさを見つけることができる。	・自分と友達のよさを見つけ、互いに認め合うことができる。
異文化理解	③自国認識と国民的自覚の形成	・地域の行事や季節の伝統的な行事に参加することができる。	・具体的な活動や体験を通して、身近な文化や伝統と自分との関わりに気づくことができる。	・郷土の自然や歴史、文化等について関心を持つことができる。
	④異文化理解の増進深化	・生活の中で様々なものに触れ、気づいたり楽しんだりできる。	・身近な文化の違いに気づくことができる	・自他の文化へ関心を持ち、理解することができる。
	⑤相互理解・相互交流	・身近な人と積極的に関わり、仲良く遊ぶ楽しさを味わうことができる。	・身近にいる人と進んで仲良くしたくさんの友達と仲良くすることができる。	・自他の違いを理解し、進んで助け合い、協力し合って活動できる。
コミュニケーション能力	⑥コミュニケーション能力、表現力の育成	・自分の気持ちを言葉で表現できる。	・自分の思いをいろいろな方法で表現し、伝えることができる。	・友達の考えを聞き、取り入れながら自分の考えや思いを分かりやすく伝え、表現することができる。
共生の心	①平和を愛する心の育成	・命あるものに優しく接しようとする。	・友達と仲良くしようとする。	・学級などの集団において、他との関わりを大切にしようとする。
	⑤相互理解・相互交流	・身近な人と積極的に関わり、仲良く遊ぶ楽しさを味わうことができる。	・身近にいる人と進んで仲良くしたくさんの友達と仲良くすることができる。	・自他の違いを理解し、進んで助け合い、協力し合って活動できる。
	⑧国際社会における連携と協力精神の育成	・自分にできることは自分であることができる。	・学級や家庭の中で役割を持つことができる。	・身の回りの問題に関心を持ち、解決しようと努力することができる。

胆振国際理解教育研究会		
小学校5・6年生	中学校	高等学校
日本（産業、国土） 日本（歴史、政治、国際社会での役割）	日本・世界（国土や歴史、政治、経済、国際社会での役割）	日本・世界（国土や歴史、政治経済を広い視野から見る。国際社会での役割）
自国文化の良き理解者、継承者を育むこと。	他国文化の良き理解者を育むこと。	国際協調に必要な具体的な行動ができる態度を養う。
・公正、公平なものの見方で相手を尊重し思いやることができる。	人々の生き方に触れ、人間として共感を持つことができる。	偏見や差別意識を除去し、人権尊重の立場から物事を考えることができる。
自分を見つめ、他人を思いやりながら、自分のよさを発揮し、自信を持って活動できる。	人間性の多様な価値に気づき、自他の個性や特徴について判断、理解できる。	自己の効力性について自覚を持ち、個性や能力を発揮できる。
・自国の文化や伝統、産業などに関心を持ち、その背景や仕組みを理解しようとする努力ができる。	日本人としてのものの見方や考え方を養い、国際社会で信頼されるような国民になるために努力することができる。	日本の制度や慣習を大切にするとともに、それぞれの国にアイデンティティがあることに気づくことができる。
・自他の文化への関心を広げ、理解を深めることができる。	自他の文化を理解し、尊重しようとする努力ができる。	自国の文化を大切にし、自他の文化の多様性を理解し尊重することができる。
広い視野に立ち、様々な考えを受け入れながら協力し合い、活動できる。	外国人との接触や交流の経験を積極的に求めることができる。	外国人との交流を通してその文化、習慣、考え方などを理解することができる。
友達の思いや考えを比較しながら自分の思いや考えを的確に相手に伝え、表現できる。	他者の考えを理解し、場に応じた適切な表現で、積極的に交流を深めることができる。	他者の考え方を理解し、尊重しながら自分の考えを的確に表現し、意志を言い合わせることができる。
・自他のよさを認め、思いやりの心を持つ。	他者の存在を認め、信頼関係を築こうとする。	社会および人間との関わりを通して、質の高い生き方を目指そうとする。
広い視野に立ち、様々な考えを受け入れながら協力し合い、活動できる。	外国人との接触や交流の経験を積極的に求めることができる。	外国人との交流を通してその文化、習慣、考え方などを理解することができる。
自分の立場から周囲を見つめ、よりよい環境となるように積極的に協力できる。	互いに尊重し合いながら協力し合うことができる。 世界的諸問題を受け止め、具体的に行動できる。	自ら協力者として活動し、社会に貢献することができる。 世界的諸問題を受け止め、具体的に行動できる。

行動・行動化できる日本人

(8) 胆振国際理解教育研究会

研究の全体構想

